

---

# 光と闇

春野 みぞれ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光と闇

### 【Nコード】

N4474D

### 【作者名】

春野 みぞれ

### 【あらすじ】

彼の一日を密着ナルトを応援して下さいませ

## 第2話 彼の一日

ジリリリリ

カチ

朝の目覚めはタイマーをセットした目覚まし時計をとめることから  
はじまる

光が窓から射し込んで眩しく感じながらも、ナルトは起き上がる。

「ふああああ」

まず起き上がったのはじめにすることは…九尾監視もといナルトを護  
衛任務についている

“現…護衛任務についている畑カカシ”が今現在見ているかどうか  
を気配を探るのだが…どうやら、今の所…いないようだ。

はあ

少しため息を吐きながら、朝の身支度を行う

実際にはナルトオリジナルの幻術入りの結界でカカシの目を欺くの  
だが…ボ口を出さない様に表で暮らしやすいようにする。要は気合  
いの問題だ。

かの少年は事…演技に関する事は完璧にしたいがためにやっている  
のだ。

彼は適当に朝飯を食べて今日の任務を反芻していた。

モグモグしながら、

えっと…いつもの如くカカシのアホが遅刻するけど、ったく…十時  
に顔岩の前に集合か…どーせ、三時間は待つだろうな。たりの…

考えをまとめ終わると愛飲している牛乳を流しこみ、簡

単に食器類を片付けてから…植物に水をやり、身だしなみを再度整えてからマル秘が入れた忍具入れと彼の個性が出ているオレンジのツナギを着てから集合場所へ表のドべらしく足音をたてながら向かっていく

表面上は“上機嫌にニコニコしているナルト”心の底はうんざりしていた

夜が早く来ればいいんだよ。夜が来れば本来の俺になれる、下忍護衛任務をする事もなく…力を抑えることなく…夜を駆け抜けることが出来るから。

そう、ホントの俺はドベじゃない。

かの有名な四代目火影波風ミナトに九尾封印を息子の俺にした親父はかえらぬままいつちまったし…お袋はうずまきクシナも同じようになくなった。そんなこんなで、俺は四代目火影の遺児っていうことなんだけど。素性は余り知られてないんだ。

まず…四代目火影の遺児って事で敵に狙われないため

火影って事だけじゃなく…黄色の閃光の異名を持つ程有名な親父に倒された敵は数知れない程にいるためだ。

術の特異性も含まれているからって三代目のじっちゃんが言ってたけどな…だから波風が名字じゃなくて母さんの苗字うずまきを名乗ってる

もう一つは俺が九尾を封印している器のため…九尾襲来で里が殆んど壊滅状態になっちまってたくさん人間がなくなった。

例えたまたま産まれた俺が封印されたんだと主張しようが…里の連中には腹がたつてしょうがない、形は違えど九尾がまだ生きている事に許せない気持ち一杯だから

だからあいつらを刺激しないように配慮で隠してきたけどどうやら…封印の器とその器の名前は知られたが四代目の子どもだとは知ら

れてないようだけど。まっ…憎しみに取り憑かれている連中は今更何を言っても信じやしないけどな

まっ…そんなこんなで里の連中に殺されかけて暴力ふるい…毒を食わされ…存在を無視し続けられたのだ。今現在進行形にされているけど

そんな俺が色々あって…今現在は下忍任務へ走ってるわけだが、到着した。

桃色少女と黒髪少年が集合場所で待っていた。

いつもの表の俺で挨拶をする

「おはよ…ってばサクラちゃんvついでにサスケ」

「おはよ…ナルト」

「フン、ウスラトンカチが」

「きい…何なんだよ。挨拶ぐらいしろ！コラあ！」

「ナルト！サスケ君に何て事いうのよ　ねっ！サスケ君v」

「フン…すぐ怒るのが…ウスラトンカチらしいじゃねえかよ」

「そ…よねえ。流石サスケ君」

はあ、いつもいつもながら…表の俺のテンションの高さにうんざりしている。いい加減にこの生活に疲れてる。正体を明かせない事が…暗部の事とか、ホントの俺を誰も知られずこれからを偽り続けながら生きて行く事が…でも、そんな泣き言ばかり言ってもらえない…そんな葛藤を感じながらもいつもの顔で力カシを待って

いた。

仕方がない…夜が来るまで待とう。面倒だけどな

太陽が真上から少し下がっていく頃にカカシはやってきた。勿論遅刻だ。

いつものように俺とサクラがツツコミをした後で、サスケの冷たい一蔑をする。

そんなこんなで、今日の任務“草むしり”が終わる頃には夕方になっており、カカシの解散とお知らせを聞いて一日を終える

夜

どどん間が深くなる頃に起き上がる。

表の任務を終えた俺は帰るなりに…眠りについた。が…忍鳥が窓をツツク音で目が覚めたナルトは窓を開けるがすぐに任務書を受けとるなり…忍鳥に例を言いながら暗部装束に着替える。

黒の密着した服を着ながら上下に急所をガードするためと攻撃力が増幅する道具を取りつける。

暗部用殺傷能力高い道具入れを足に付けてから黒のマントを纏い…仮面を付けてからいざ…任務開始

飛来神の術で顔岩辺りに移動してから任務書に記載されてある。とある場所で人身売買している組織へ侵入

“ 任務内容は組織の人間を全員抹殺せよ ”

影分身を出してから…分身と共に潜入してから手当たり次第に二手で殺していく。人身売買されかかった人達は地下室に閉じ込められているために思う存分に殺せるため…いろんな術を用いたり、クナイなどで仕留めたりして、流れる血の量を増やしていった。

血が川のように流れる頃には組織の人間の殆んどはモノ言わぬ死体となっていた。分身は地下室を見つけたようですぐさま鍵を開けた

これで後で来る木の葉の別部隊が来る時に気付くだろう。  
そう思い…死体を処理し…痕跡を残らぬように消した。

それを見て確認した後で分身を消して去っていく。

彼は見られてはならないから…気配を完全に消して里へ戻り…報告と前日の報告書類を渡し…自宅へ帰ってから風呂で血を洗い流してから就寝する事によりやっと一日が終わりを告げる。

それが彼の毎日

### 第3話 きっかけ

いつもように清々しい朝を迎えた

ナルトにとっては嬉しくも何ともないが…

ゴソゴソ

ああ、面倒くさい下忍任務が今日もはじまるゝん？時計を見ると、いつもより早く起きちまったようだ。六時か？ん、ふあ…もう一度寝られなんねえし…うし、早く出るか。

そう決めたナルトは素早くベットに降り立ち朝飯を作るために台所へ移動した。

いつものと違うラーメンに卵を落として

牛乳をグラスに注いで…うし、朝御飯完了！

ぐう

出来上がったと同時に腹がなる俺の体に苦笑いしながら、朝飯を頂く。

ズルズル…ゴクン

手には牛乳に入りグラスを持ち上げて…身長が伸びますように何て願いながら飲み込む。

ゴクゴク

プハア



綺麗に食べ終わった後は洗い場にグラスを置いて…カップラーメンの残骸をゴミ箱に入れてから身だしなみを整えてからアパートから集合場所へ駆け足で走って出る。勿論

「行つてきまゝすつてばよ！」

表の俺らしく、自分に向けての挨拶がわからない。何せ誰が見ているかはわかったもんじゃないから

タッタッ

足早に駆けて行くと周りの店が開店準備に忙しくて…少し活気があるが、ほとんどの人間がまだ布団の中にいるようで静かな空気に包まれているのを感じた。

よし、何事もなくアカデミーへ行けるな

俺は少し安心してたんだ。今日は誰にも襲われずに済むってなでもそんな微かな期待は脆く崩れた。

タッタッ

スタン…トン

足をとめてアカデミーの門の前で息を吸い込むナルトに背後から気配が3つ程感じるが…“力がない天然馬鹿なドベ忍者”ナルトは設定通りの知らぬフリをだからし続けている。

後百歩の距離だな。それにもの凄い殺気を立ててやがる

スタスタ

どんどん近付いて来る

スタスタスタ

後数十歩か…狙いは九尾を持つてる俺…だよな。くそ、今日も下忍任務があるってのについてねえ。

スタタタ…スタン

後五歩か…死なない程度に願ってるか…はあ

スタ…

来た！

ポン

「おいガキ…ちょっと面を貸せよ！な」驚いた振りをしながら…声がする方向へ振り向くと…嫌な笑いを浮かべた中忍の三人はナルトをいきなり浚った

！！嘘だろ

「…いきなり何するんだってんだよ！離せ…離しやがれ…」

ニヤニヤ

男達三人はナルトの声を聞きながらも…聞こえてないフリをしながら…人里離れた土地へ移動していく。ナルトが男に掴まれているた

めに…抜け出そうにも脱け出せず…悔しさに顔を歪めながら…自分より身長の高い男達を下から睨みあげた。

それが更に男達の笑いを誘った。

くそっ…俺がこんな目立つ所じゃなかったら…幻覚とか使って逃げ出すのによ。

今日は暴力かな？ハハハ…ついてね。爺さんの約束だもんな。出来るだけ里の人間を傷つけない…って奴が俺をここまでの状態を我慢してる訳で。たく…犯すんだったら…ためらう事なく一気に殺してやるよ…。まっ、滅多にないけどな…もうそろそろ…目的の場所に着きそつだし…もう少し演技で付き合ってやるか。

## スタン

ある人里離れた木立に辿りついた…よく見ると…里から離れているのに忍が多く集まっていた…計画的なようだ

「…お…いたいた、みんな集まっているようだぜ」

「だな！コイツを目当てにな」

「そついう事だな！おい、化け狐…テメエに用があるようだ！可愛がってもらえよ…ほら…」

“ドン”

ナルトを連れてきた男達の一人にナルトを強く押した瞬間にバラン

スを崩しながら…男達の集団へ倒れこむようにナルトがふらつく。  
「っ…一体何する気なんだ。オメエら！」

団体の男の一人が口を開いた

「決まってるだろ…九尾のガキ…テメエを可愛がってやるんだよ」

バキッ

急に放たれた拳を顔にぶつけた瞬間から一気に多数の男達が殴り掛かってきた急に多数による攻撃に流石のナルトもひとたまりもない…

“ドガ”

バシバシ

ガチっ…グシャ

バキ

ガッガッ…ゴツ…ボキ

避けたり…やり返すの事が簡単出来るが、ただの下忍がそんな事が出来るはずがないために…やり返したくてもやり返せない…しかし、ナルトがすぐに体が崩れてしまい…うつ伏せになっても攻撃が止まらない。

血がどんどん破れた皮膚から“ポタポタ”から“ドビュ”と沢山の血が流れて行くようになった。

目に頭に足に手に腹など一杯に殴って蹴りやがって…ちきしょう。目が霞む程に血を流させやがっ

て…終わるまで意識を閉じるか。

男達はナルトが意識を失っても殴り蹴り続ける…

ドンドン

ミシミシ

それでも足りないのか…男達は口々に言う

『化け狐』

『お前の存在が汚らわしい』

『厄介者が…』

『我々の家族を返せ』 『恋人を返せ』

『英雄を返せ』

『三代目の恩恵を受けておるくせに…さも当たり前の顔をするな』

『お前は忌み嫌われるためにいる存在』

『我らは憎しみを忘れない』

『我らはあの時の悲しみを忘れない』

『覚えておけ…我々はお前を許さない』

ハアハア

男達は満足するまで暴力と暴言を吐いた後に散々に去っていった。

パチッ

ナルトはそれから数十分ごろ意識が戻った時に周りを見ると…誰もいないのを確認すると服の汚れを払い落として…集合場所へ向かうと立ち上がろうとした。

ズキズキ

痛くそつたれ！思いツきり殴りやがって…普通の人間なら死んでるぞ。つたく痛い…ここに居たままだと…危険だ！くっ…行くしかねえ…

気配を完璧に消して“瞬身の術”

シュン

たった一瞬で金髪少年はアカデミーへ移動した。アカデミー前にて桃色少女と黒髪少年は門の前にいた…例の如く担当上忍は遅刻だが…意外に時間を律義に守るあの少年を心配しているためである。

ナルト遅い…

あのウスラトンカチが何やってやがる

二人が同時に考えている時に…ナルトはアカデミーの裏の木立に着地した。

ハアハア…くそ…九尾の力を持つてしてもダメージが酷い…何とか演技力でカバーするしかねえ…急がないと

スウと大きく息を吸いこんで…ピシッと背筋を伸ばして…ドべらしく門へ向かって行く。

タッタッタ

二人は金髪少年の大きな足音で顔を向ける。その瞬間に大きな声で「おはよ…ってば！さくらちゃんvついでにサスケ！」

桃色少女は心配した顔しながらいつものチームメイトに話しかける

「おはよ                      ナルトおゝアンタ遅い…わよ…あれ？」

「フン…何やってやがるウスラ…トンカチ？」

「あはは…二人共どうしたんだってばよ？」

二人の反応に違和感を持ちながら聞くナルトに二人は声が出なかった。

当たり前だ！ナルトの服はボロボロで所々に破れたり…汚れている上によれよれで…髪はグシャグシャで首や顔には痣があるのだから目には殴られた後の様なパンダの目の様な後があるのだから尚更だろう。

二人は恐る恐る聞く

「「お前<sup>アンタ</sup>一体どうしたんだよ！（どうしたのゆ）」「」

ナルトは聞かれる内容に想定以内為にドべらしく答えると  
する

「あはは…俺ってば！馬鹿だからさ…アパートの階段から誤って落ちちゃってしまったんだってばよ！」

それを聞いてサスケは呆れて溜め息を吐く…だけどサクラは違うようだ。

「アンタ…それ…前にも言ったよね。ホントに階段を誤って落ちたからなの？ナルト」

ギク

ナルトは内心…びっくりしながらも演技を続ける…長年培った仮面は中々外れない…

「サクラちゃん、俺馬鹿だから同じ事をやっちゃったんだってば！だから、怪我は階段のせいだってば」

サクラは内心信じられないものの、ナルトの満面の笑みに押しきられてしまった。

「う…うん。そうよね！アントドベだもん。間違いを何度も繰り返してそうだもんね」

ホッ 信じてくれそうだな…ナルトはそう感じた。演技はちやんとこなす

「うんうん…そうだってば！うん？サクラちゃん…それは一体どういうコトだってばよく酷いってば」

「あはははは…ゴメンゴメン…」

「サクラちゃん…凹むってば」

「あっ？そうそう…カカシ先生はいつ来るかしら」

そうやってカカシが来るまでサクラ達はじゃれあっていたりそうして…二時間後にカカシが遅れてきたのをナルトとサクラの息の合ったツツコミで任務開始した。

“ 川の中のゴミ拾い ”



“バシャバシャ”とある川の中に入る下忍達はゴミ袋を片手にゴミを拾い入れて行く。だけど、彼らの着ている恰好ではやりにくいために…サクラとサスケは工夫をしていた。が…やはりナルトは傷が治り切れてないためにツナギを着たまま作業をしていた。

ふとそんなナルトを見ていたサクラは声を掛けた。

「ナルト…！ツナギが殆ど水に浸かってるから脱ぎなさいよ…」

チツ

サクラには階段の怪我だと嘘を言った手前…ツナギを脱いだら打撲跡を見たらアウトだ！巧く誤魔化さねえと

苦笑いしながらナルトがこたえる

「ハハハ…サクラちゃん…この服は俺にとっては一張羅だから、例え誰が言おうと脱ぎたくないんだってばよ！だから、ゴメンな」

「何訳分かんない事を言ってるのよ…いいわ…私が上だけ脱がしたあげる」

というなり…サクラがナルトの上着を脱がせ始めた

「ちょ…ちょ…サクラちゃんってば…いい…いいから…！」

ナルトが抵抗しても…それでもサクラは止まらない…ついには

ビリッ…ズツ　　バツ　　サクラがナルトの上着を脱がした

派手な上着の下に着ているのは地味な黒のポロシャツ姿のナルトを見つめるサクラは驚き固まっていた。

すぐにナルトはサクラに取られた上着を取り返してまた着る事が出来た。

サクラはナルトの傷跡を見て：ナルトな動作を止める事が出来なかったのである。一瞬だけ派手なツナギの下は少年の華奢な体形と様々な傷：裂傷に打撲跡に骨が折れた事により奇妙に膨らんだ腕に引つ掻き跡など大小様々な怪我があったからだ。

ナルトは気にする事なく。作業に戻っていった

が：サクラは無意識に近い動きで作業を再び開始しながら考えていた：

朝のナルトが言った理由だけでは：片付けられない怪我だった！思えば：ナルトとチームメイトになった時から疑問だった：何故か嫌われている彼：悪戯とかトベだとか言われていた理由かなと思っていたけど。そんなじゃない：って子どもの私でもわかるの：そんな事じゃないって事位：でも理由が分からない：そしてナルトは何かを隠しているってのが今日気づいたけど

ねえ？ナルト：アンタは何を隠してるの：そんな怪我までする隠してるモノって何なの！？

サクラがそんな考えは任務が終わるまで続いたのだった

## 第四話 衝突

次の日の朝

サクラは集合場所へ急ぎながら考えていた。

ナルトの傷跡を見てから気になる…いつもいつも笑ってるからただの馬鹿だと思ってたけど、何かを隠してる気がする…でもでも…それが何か分からない…ふう…ナルトが気になる何てどうかしてるわ。でも…気になるんだもん…何故か知らないけど

集合場所である甘栗甘の店の前についた。

そこでは自分のチームメイト以外にキバのチームとシカマルのチームが先に待っていた。

サクラはふと疑問に感じた事をシカマルに聞いた。

「ねえ？ちよつと！」

「ふわあ…何だよサクラ」

「もしかして今日の任務…合同？」

「あ？何言ってるんだよ。だから集まってんじゃないか…な？チヨウジ」

「うん…モグモグ…そうだよ…そのために僕達は待ってるんだから…」

チヨウジが手に持っているチップスをまた口に運ぶのを見ながら…サクラは言い知れぬ苛立ちを覚えた。

また…カカシ上忍は連絡を真面目にしなかったのだから…

それから集合時間ギリギリでサスケを担いだナルトが到着していた。

ナルトに担がれているサスケという姿に周りは一瞬驚いたが…流石というか何と言うか…自称 恋する乙女二人はナルトの所へ突進し…一体どういう事が問いつめた。

「ナルト！アンタサスケ君をどうして担いでんのよ？」

「キリキリ話しなさいよー！」

二人に押され気味ながらも今の状態は良くないと瞬時に判断したナルトは懸命に説明をする。

「ちょ…ちょい待つてくれってばよ！サスケが倒れていて…なかなか起きてないのをほっとかずに俺ってば連れてきたんだからな」

「ええ！そうなの？」

「ナルトが？」

「そうだってば…なのにさ！なのにさ…二人に怒られるなんて！そりゃ、ないってば」

「あはは…ゴメンゴメン…アンタがそんなのをする何て思わなくってさ」

「イノってば…俺をそんな風に見てたんだ？ヒドイってばよ」

「まあまあ…許してよ…私もアンタにしては似合わない事してるなって…」

「サクラちゃんまで…はあ」

ナルトはがつくりと肩を落とし…サスケも同時に地に降りた  
「ああ！サスケ君」

イノがサスケに駆け寄り…サクラも駆け寄るが…

フワ

血の二オイがしたのを気づいたサクラは微かにナルトから漂ってる  
のを気づく。

そしてナルトを見るといつもと変わらない笑みを浮かべているが…  
少し顔がこわばっていた。

サクラはサスケでイノをほつといて…ナルトに足を向けて…数歩近  
寄ってナルトに話しかける

「ねえ…ナルト」

「ん？何だってば…サクラちゃん」

「アンタから微かに血の二オイがするんだけど…何かあったの？」

「っ 別に大した事じゃないってば！」

「大した事じゃないわよ！ねえ何を隠してるの？答えなさいよ！」

いつもの笑顔がこの時ばかりは憎たらしいとこの時ばかりはサ  
クラは思えて…強くナルトに詰め寄る                      それが逆にナ

ルトを苛立ちさせるとは知らずに                      くそ！いちいちウルセ  
ェんだよ…サクラの奴…ったく…少し本気で警告するか…

ナルトは演技をしながら巧みに言葉を出す。

「どういう事だってば？サクラちゃん」

「どうもこうもないわよ！ナルト：昨日の事と言い：今日の事まで  
アンタの隠してる事を言いなさいよ！」

サクラは思わず最後の言葉を大声をあげてしまった。

その声により、近くにいるイノだけではなく：他の下忍達に注目を浴びながらナルトはニコニコ笑いながら戸惑ってる顔をしながら：素早くサクラの耳元に呟いた。いつもの口調ながらも夜の彼雰囲気  
を纏いながら

「：サクラちゃん知ってるってば？好奇心は猫を殺すって事を」

え？とすぐに振り向くといつものナルトに戻っていたのを見てサクラは呆然とした

イノはそんなサクラの気持ちを知らずにナルトとサクラに詰め寄るが：サクラは曖昧な反応でイノの期待した答えがなかったためにすぐにナルトに聞く：この時彼は大きな声で言った

「イノ！隠してる事ってのは：また：俺ヘマをやって怪我をした事だってば！」

「あ：あんた：怪我大丈夫なの？」

「大丈夫ってば！じゃなきゃここに行けねえーてば」

「ま：そうだけど：だけど怪我って」

「ハハハ：俺ってば：コケて色んなトコにぶつけて痣だらけにニワ

トリ小屋に入っちまって…ニワトリにつつかれて酷い目にあっちまう事がよくあって…サクラちゃんに心配されててさ…黙ってたけどバレちまったってば」

それを聞いたイノは呆れを入り混じった声で  
「ホント、あんた…ってドジよね」

他の下忍達も呆れたり…苦笑いしていて納得している面々の姿があった。

唯一サクラだけを残して          ナルトはイノと他愛もない話しをしながら…サクラの様子を観ていた。

あゝあ、ついてねえな！サクラは疑問を抱いてやがる。思えばサスケを狙った霧の忍が襲いからなきや…俺が血の二オイが移らねえし…サスケの記憶をイジル必要もこの面倒くせえ事態にならなかった筈だ。

今日は厄日か…くそ！こうなったら演技し続けてやる

ナルトが決意を固めてる内にカカシにアスマに紅がやってきた

やっと任務が始まりそうだ任務内容

“下忍達全員総出で崖に落ちた…嫁入り道具を拾い集める”

サスケが起きた瞬間に始まった任務          数多くのブーイングを下忍達は発したが…アスマの一言で任務をやり始めた。

「おいお前ら…今日の任務でランダムに班分けしてからどの班が一番多く任務をこなしたら甘栗甘で負けたチームが奢ってもらえるぞ」

それを聞いた下忍達は俄然やる気が出たのだ。ただ一人の下忍は内心… 退屈だなと思いながら表面上は一番やる気がある振りをしていたが

もし彼の心が見える者がいたからこう思っただろう… 表と裏の温度差が激しい事に  
それに関わらずに器用にこなす所にも驚く事だろう

そんな事を露知らずに班分けが決まった。

カカシ班はサスケにキバ & 赤丸にヒナタ  
紅班はイノにチョウジにシノ  
アスマ班にシカマルにナルトとサクラ

以上3つの班に別れたのだった。

シュンシュン

キャンキャン

タッタッタ

ズサツ

様々な個性を出す… 下忍達は移動していた。1日だけの新生の班のために少しきこちな

流石というか上忍達は先に行っていた。

もう少しで目的地に着く下忍達が汗だくになりながらも着いた所は… 断崖絶壁の谷間が広がっていた… 一見にしたら気が遠くなりそうな谷に下忍達は不安気ながらも支給されたロープを体に取り付けて重りになる岩や木にくくりつけながら谷に降りて行った



下へ下へ

ナルトは暗部で鍛えた技術をいかになく発揮しながら谷へ降りて行く。彼にとつては造作もなく…降りられるが他は皆はおっかなびつくり四苦八苦しているためナルト凄さを見ることはなかった。

おお深いな！…たく…どうやって落とすんだ…こんな所に嫁入り道具を…はあ…お！これか…早く帰るために頑張るか

ナルトが目的の物を見つけてからカゴに依頼の品々を次々に入れていく

“タツ…ダン”

シカマルはようやくナルトの隣に降りた…たそれを気配で知ってるナルトは作業する手を止めずに仮面を被る。

ナルトにしてはやるじゃねえか！声かけてみつか…

「おい、ナルト！はええなお前…」

「シカマル！いつの間につてば！驚かせんな…」

「ちょい待ち…忍なら気配で気づけよ！やっぱドベはドベか」

「むつきい…ドベってゆうなつてば！せつかく頑張ってるのに…」

「あゝ悪かったよ！な！この通り…甘栗甘でチヨウジ達に奢るのは勘弁だしな…」

「くま…俺もそう思うけど…だけどさ…あんまりじゃねえ？シカマル」

「ああ…今度一楽のラーメンを奢るから」

「ホントだな？」

「おう…男に二言はないからな」

「よっしゃあ…やる気が出たつてばよ！一楽！いちらく」

「はは…単純な奴…まっいいか」

こうして二人は嫁入り道具を拾い集めて行つた。サクラは崖に引っかかっている物を綺麗に取り外していた…ナルト達が順調にこなしているが他の面々は独特なやり方をしていた。

キバ達はまずヒナタの白眼で依頼の品々を見つけて拾うが…なかなか取れ難い所にはキバと赤丸のコンビ変化して“牙通牙”で邪魔な岩石を削り…サスケが素早く品々を手に入れるというワイルドなやり方をしていた。

イノ達はシノの虫による探知をしてから依頼の品々を見つけてからイノとチョウジが運び出していく

極たまに運ぶのに疲れたチョウジが倍加の術で大きな物を押し上げて運ぶという大胆な作戦で次々とこなしていった

夕暮れ時

には総ての品々が崖から運び出されていった。

周りには疲れきった下忍達の姿が所々に見えていた…カカシ達上忍はまた後日に甘栗甘に行こうと下忍達を伝えてから3日後は演習ま

でに疲れを癒しておくようにと伝えてから依頼の品々を持って去っていった。

辺りには…甘栗甘目当てに頑張っていたチョウジとイノを中心に皆お疲れモードに入っていた…

それから二時間後にナルトが回復したのですぐ立ち上がり…里に帰ろうとした。

驚く下忍達…無理もない…使い慣れてない体を酷使して調度品やら何やらかんやらを運び出したのだ。疲れがまだ取れないはず！なのにナルトは腕をぐるぐる回しながら言い放つ

「みんな！俺ってば！そろそろ帰る時間だから帰るな…じゃ。またな…ってばよ」

みんなが反応を返す間もなく猛スピードで帰るナルトに皆呆気に取られた

「あいつ…元気よね…どんな体の構造かしら」

「うむ、少し気になるな」

「だねえ…ボクにはあの元気が羨ましいよ」

「ありゃ、元氣過ぎだろう…どんなってんだよ体力バカが」

キバの言葉に反応して赤丸も吠えた。飼い犬は飼い主に似てるといえよう。

「ふう…でも疲れ…ちゃったね」

「そうね…シャワーを浴びて疲れを癒したいわね」

「ったく…もう帰るか…面倒くせえけどよ」

シカマルの言葉を最後に各々立ち上がり帰っていった

“ズサッ”

黒いマントを纏い…暗部は下忍達全員が里に着いて家路に帰るまで見守り続けた。

終わる頃には彼も変化を解いてからボロアパートに入って…ベッドで眠りについた。今日一日も多少のトラブルがあったが…何とか終わる事が出来たとナルトはまどろみながらも一人ごちた。

## 第5話 お誘い

久々の彼にとっては珍しい午前はおフ

だけど…夜は暗部の任務があるためにまるまる1日が休みになるなんては流石の彼もしらなかった

朝

ナルトは久々にゆっくりと睡眠を貪りつくしてから…すっきりとした気持ちで朝を迎えた。

つい、周りを見て…つい先日のおくらとのやりとりをフと考えながら…やかに水を入れ火にかけた。

おクラの奴しつこいよな！

もうすぐ傍まで来る気配を感じながら…ナルトは苛立てていた。滅多にない両方オフを最初からブチ壊そうとする女に腹がたつて堪らずに影分身の印を結ぶ。

ピュー

ふとやかんの水が沸いた瞬間に火を止めると

コンコン

とノックする音がする。それにタイミング良く“ドベナルト”がドアへ向かう。

本体は気配を消し…やかんとカップラーメンを片手に別の部屋へと移動した。

誰があんな小娘に付き合ってられるかっての！今日ばかりは俺のしたい様にさせてもらっぜ

ゴンゴン

「ちょっと！ナルト！さっきからノックしてんのに開けなさいよ」

はあ、ご主人が嫌がる筈だよ。お前人の家なんだと思ってんだよ…おっと、いけない…いけない“いつもの俺らしく”っと

「はいはい、待っててば！サツクラちゃん」

「っさい、そんな事いいから、はい、早く開けなさい」

“わかったてばよ、サクラちゃんツレナイ…” ブツブツ言いながらドアを開ける

ガチャ

やはりと言つか桃色の髪の少女がそこにいた。なんだか怒っている

ようだ。

待たされて…すぐに開けないナルトに腹がたっているようだ。

何よ何よ…乙女を何待たせてんのよ！シャンナロ〜ナルトの癖にして

うつすらともう一人のサクラが出ているのでヤバイと感じたナルトは慌てて用件を聞こうとする「とっ、所で朝からどうしたんだってば」

ハッ

サクラはナルトに対しての苛立ちの余り…本来の用事を忘れていたようだ。“こっ…コホン”余りに恥ずかしいながら威厳を保とうと取り繕うサクラは最早滑稽だ。

わかってながらも分からないフリして不思議そうな顔でサクラに話を伺う。

「この前…先生達が奢る話があったじゃない？」

「あっ…あつたような…なかったような、で…それでそれで」

「はあ、またお馬鹿さんの発言でた。まっ、奢るのが今日になって…一緒に行くわよって話」

いつもながらの強引な話しぶりにナルトは内心“決定事項かよ…ってか拒否させるよ、本体はまさか知ってたりして”と反応様々である。ドベとしてはサクラからの誘いは断る事が出来ない。

一応…サクラが好きな設定のためである。

かなり考えながらも表らしく反応する

「勿論今すぐ…行くつてばよ…で早く着替えるから待っててば」

ダダダダ

ガサガサ…グシャ…カチャ…タタタタ

「お待たせつてば！サツクラちゃん！行こうつてば…早く早く」

「ちょ…押さないでよ。分かったから…もう…」

ガチャ…パタン

カッカッ…カンカンカン…

二人の少年少女が慌ただしく出ていくのを聞きながら…本体はズツ…ズズーとラーメンをすすりながら静かに言った。

「行つてらっしゃい…カンバレ」

その声は届かず…音とともに消えた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4474d/>

---

光と闇

2010年10月15日00時50分発行